

大学の授業における生成AIの現状・リスク・活用法

2023年度から始まりました「たちばな教育セミナー」では外部講師をお招きし、設定した年間テーマに関して基礎編と応用編の2回に分けた学習会を行っています。今年度のテーマは「授業における生成AIの活用を考える」とし、講師は大阪大学全学教育推進機構准教授の浦田悠先生にお願いしています。先生は、同大学における生成AI活用ガイドラインの策定やFD活動に関わる他、多くの大学で本テーマに関する講師をお務めです。今回は、6月24日に開催された第1回セミナー「基礎編：生成AIの現状・リスク・活用法を知る」の内容を紹介させていただきます。当日の動画や資料は、[教育開発・学習支援室WEBサイト](#)よりご覧いただけます。

(1) 生成AIの特徴・使い方

- ・生成AIは、文章生成AI、画像生成AI、音楽生成AI、動画生成AIなど多様である。
- ・生成AIの利点は、作業の効率化、アイデア生成、情報収集、よろず相談等ができる点である。
- ・利用上の注意点は、間違いの生成、根拠の不明瞭さ、未学習情報の対応不可、倫理的問題等である。

(2) 大学の現状

- ・各大学がガイドラインを作成して学生に周知している。
- ・2024年秋調査によると、50.4%の大学生が生成AIを利用している。(23年より約20%増)
- ・生成AIが出力した結果をコピーして提出したことがある学生は25.8%で、そのうち80.1%がそれを不正行為だと認識している。

(3) 評価をどう変える？

- ・AI時代の学習評価設計：①AIを使わせない、②AIの利用を認める、③AIを積極活用する
- ・授業や課題におけるAIの使用範囲、許容される使用方法を定義し、周知する。

(4) 教員はどのように活用できる？(授業関連業務での活用)

- ・コースの準備：シラバス案を作成・修正する。授業資料を一括登録すると、シラバス案ができる。
- ・授業の準備：ワーク案、資料用イラスト、スライド案、ルーブリック案を作成する。
- ・授業の実施：提出物を要約する、要配慮学生用の資料を作成する、補足説明Podcastを作成する。
- ・評価：試験問題案、レポート課題案、評価案、フィードバック案を作成する。

* (注意点) 学生の個人情報を入れない、会話を学習させない設定にする等の対応は必要

(5) 今後の利活用に向けて

- ・まずは自分の目で確かめてみる：実際に使ってみると、強み、弱み、リスク等がわかる。
- ・ベストプラクティスを取り入れる：安全かつ効果的な活用事例やガイドラインを参考にする。
- ・最新状況をチェックする：機能のアップデート、社会状況の変化をチェック。(生成AIも回答可)
- ・授業づくり、関係づくりを見直す：不適切な利用へと動機づけられない授業設計・授業環境が大事。

2025年度 第2回たちばな教育セミナー「授業における生成AIの活用を考える：応用編」

2025年10月3日(金) 15:15~16:55(オンライン)

「生成 AI を学生に活用させる授業づくり」

2025年5月28日に、本年度第1回目の「たちばな教育サロン」を対面とオンラインを同時に行うハイフレックス形式で開催し、58名（対面17名、オンライン41名）の方にご参加いただき、過去最高人数を更新しました。また、今回は初めて京都橘中学校・高等学校の先生も参加されました。以下は、当日のポイントをまとめたものです。報告動画やスライド資料は、[教育開発・学習支援室WEBサイト「学内FD関連動画」](#)からもご覧いただくことができます（パスワードはメール本文に記載させていただいております）。先生方の授業づくりの参考になれば幸いです。

報告1：Learner DevelopmentのためのChat GPTを用いた英作文指導

国際英語学科 弥永 啓子 先生

国際英語学科の専門教育科目「Career English」について紹介します。生成AIは、辞書も使えず英文法もままならない学生が英作文を学ぶ上で大変有益だと考えました。学生が作成した英文が生成AIで作ったものかどうかを判別することに精神をすり減らすよりも、彼らが生成AIを有効活用して、彼らの学ぶ力を高めることに注力するほうがよほど生産的だとも考えました。

この授業では、「アナログで始めて、アナログで終わる」ことを意識して設計しています。具体的には、①教員が提示した課題についてどのようなことを書くかを学生同士で議論して考える、②手書きで英作文してみる、③手書きで英作文したものを写真撮影する、④生成AIに教員が作成したプロンプトと自身の英作文写真を添付して評価と指導をしてもらう、⑤評価と指導についてわからなかった点を生成AIに質問する、⑦以上の過程をワークシートに書き入れる、⑧ワークシートを用いて学生同士で解説しあう、⑨改めて手書きで英作文する、というステップを授業+授業外学習で繰り返していきます。成績評価では、英作文そのものではなく、このワークシートの出来栄を確認するようにしています。

英作文はすぐに学習効果が表れるものではありませんが、3時間目という眠たくなる時間にも関わらず受講生は集中して活発に学んでいます。また、徐々に作成文章が長くなってきており、何をどのように書くべきかという思考力と表現力が高まってきているのではないかと実感しています。

報告2：生成AIを授業に生かす

児童教育学科 池田 修 先生

児童教育学科の専門教育科目「学級経営論」や卒論指導について、今回は3つの事例を紹介します。

1つ目は、実務で作らなければならない「学級経営案」「個別指導計画案」「保護者会の案内文」などを生成AIを使って作ってみるという取り組みです。実務での生成AI活用をイメージできると同時に、わからない用語についてさらにAIに尋ね、より状況に合わせた制作物になるようにAIに指示を出す方法などを実践的に学びます。またAIが制作したものの不足を教員が指摘することによって、AIに使われるのではなく、AIを使ってよりよいものにするということがどういうことかの理解も深まります。

2つ目は、授業中に学生の声をFormsで集め、それを生成AIに即時分類・選別させて、フィードバックする方法です。学生の自由記述は大変有益ですが、その分類を手作業でしようとする大変な時間を要します。しかし生成AIであれば、学生の記述をコピー&ペーストし、「分類して」「ユニークなものを選んで」と指示すると一瞬で整理してくれます。これを使って授業をすると、受講生全員との双方向型授業がとてもしやすくなります。

3つ目は、「統計の橘さん」です。これは、学生が生成AIを使って効率的に統計を自習できるようにプログラムしたものです。私のゼミ生はこれを使い、統計分析を用いた卒論を全員が書き上げました。[京都橘大学・学習支援室WEBサイト](#)（学内限定）からアクセスいただけますので、宜しければ活用ください。